

ダンテにおけるトマスの輝き — 神曲天国篇の現代的解釈 —

英知大学教授 今道友信

1 題について

具体的にはダンテの文学的主著『神曲』とトマス・アクナスの神学的主著『神学大全』の比較研究の一端ともなろうし、キリスト教的文学とキリスト教的神学の相互関係の解明の一助ともなろうとする研究である。それはまた信仰の気圏において神学と詩とを結ぶ哲学の新しい課題への試みでもあろう。

2 輝きという語について

天国はいかなる処かと想うとき、それは暗く閉ざされた処ではなく、輝き渡る自由なひろがりであると思うことが出来る。それは先ず輝きの場であり、それは光そのもの(神)ではなく神の輝きが照り渡るところである。

Danteは神を光源として *luce* と呼び、例えば *Par. XXXIII. 124 O luce eterna* (おお永遠の光源よ) と父なる神創造主のことを呼び、*come lume riflesso* (反射の輝き、反射の光線) と *Par. XXXIV. 128* で子なる神キリストのことを述べているように、光源としての光 *lux* とその明りとしての光線としての光 *lume*、輝照としての *gloria* (*una favilla sul della tua gloria* 汝の栄光の輝照のただ一筋をだに、*Par. XXXIII 71*) とを明瞭に分けている。私がここでダンテにおけるトマスの輝きとは、それゆえ、基本的にトマス・アクナスの光源から、その神学から、ダンテの栄光の光線としての輝きが放射されていることを明らかにしようという意図をもっていることは明らかである。しかし、そのことはトマスを原因とし、ダンテをそこから派生する結果のひとつとして見ることではない。ダンテの輝きは極めて独自の現代を照らしている。

O luce eterna che sola in te sidi, おお永遠の光、自己存在で、
sola t' intendi, e da te intelletta 自己認識をし、自ら知られ、
e intendente te ami e arridi! 自らの愛にほほえみたまう 天国篇 33歌 124-126

ダンテがこう歌っているように、神は自らの基礎を自らにもち(汝のうちにおみ坐(てあり)汝自らを知り、それゆえ自ら知られ、かくて充足している汝自らを愛しほえむ完全存在であるが、その次の歌に汝の照り反しかとも思われる汝の生めるあの環(*quella circulation*)の利子なる神キリストの輝きかなければ、その完全な絶対存在者の教えは人類に伝道者はいないことになる。キリストは神の教えをキリストの説教と行いと愛(口伝、行伝、心伝)で人びとに教えた。教会はそれを聖書にまとめた聖伝とと共に人類に残した。トマスがしたことはそれらの教えの理性的証明や知的解釈である。『神学大全(*summa Theologiae*)』はその成果である。かれはギリシアの知性アリストテレスを師と仰。

ダンテはイオアサしたのか。ダンテはローマのウァルギリウスを師とした。敗軍の将、挫折の身の *Aeneas* をして *Roma* を建てしめた *Vergilius* (*Vingilio*) を師としたことは、理性的証明や知的解釈の体系であるトマスの思想を、アリストテレスから解放し、想像 (*imaginatio*) と詩(敘事詩 *poesia epica*) で *Vergilius* がギリシア詩作品に添えてローマ

*ダンテのトマス研究が実際にどういうものかはよく解っていない。古くは E. Gilson の *Dante et la philosophie* は 2003 年出版された。今回は福理教授との対話があるから、トマス・アクナス倫理学の研究も 1997 年トマス研究員として奉命する。

ダンテにおけるトマスの輝き—神曲天國篇の
現代の解釈

の identity のためにラテン語で書いたように、キリスト教会の知的人士のラテン語の著作に対し、当時俗語と言われていたイタリア語で、恋を失い、政治で失敗し、挫折の人となった自らを建て直すとともに、ボニファチオ八世を始めとする法王(教皇)の墜落によって苦しむ教会を建て直すことを企図し、一般のイタリアの知識人に訴えかけようとした。それはトマスという知的光源からのダンテの新しい宣教の光線、輝きなのである。

3. 美の問題

輝きは美しい。その輝きの中には時として光源よりも美しい輝きがある場合がある。もとより、それは神を光源とするような大きな光源ではなく、小さな光源 luce の場合である。例えば電燈は光源として美しいとはいえない——特に蛍光灯——がある種の工夫をした電氣スタンド(筐の色や形)の備品で放射している光線は、光源よりも美しいことがある。トマス自身の美学は、今人がとが一般に論じている水準よりはるかに興味あるものと思われるが、ダンテはトマスも光源とする輝きではあるが、ことが美の問題となると、ダンテの方が断然すぐれている。

ダンテは各篇でオラクルからその領域らしいが特色を以て出てくるように作詩しており、地獄篇ではオラクル68で予告された la città c' ha nome Dite テオテの右をト都市つまり地獄の内門はオラクル初行の Quel color che viltà di fuor mi pinse 「顔に浮かび出た怖気の色は」に始まるが、煉獄の内門もその篇のオラクルでは l'angelo di Dio (神の天使)が un portier (門番)を以てする階段から本式の煉獄に在る。そして、天國篇でもオラクルから本基の天國らしい所が述べられる境界は 118-120 である。天國には城門はない。大地の名残りがここから先は及ばないところがここである。それはダンテによってこう歌われる。

Da questo cielo, in cui l'ombra s'appunta	この天は人の世の影の果て
che 'l vostro mondo face, pria ch' altri'alma	主の凱旋に依る誰よりも
del triunfo di Christo fu assunta.	彼の女こそ先に受け入れられた

この詩には多少の註釈が必要であろう。「この天」とは cielo terzo o di Venere (オラクルすなわち金星天)で、そこは人の世の影がもう厚くなくなる境界線で、つまり天國的超越が始まる所である。「人の世」と訳した原文は il vostro mundo (あるべき世界)であって、ベアトリーチェがダンテを導く現世のことを意味するので、このようにした。もとよりそうすることによって八七の訳詩の口調を守るためと、またさらに大切なのは意味をわかりやすくするためである。「主の凱旋に依る誰よりも」と訳したところの直訳は「キリストの大勝利につき従った多くの人びとの中でほかの誰よりも先に彼女こそが先にここに(天國に)受け入れられた」となり、その彼女とは 115 行目に名があげられているラハブ(Raah)のことである。この女性^{エリコ}は女であつたが「ヨシヤ記」2章にあるように預言者ヨシヤの部下二人をかきつけた。命かけて天國の聖人を助けたこの一度の美しい心の行方によってラハブは、救まキリストの洗礼を受けられなかった(旧約時代)

* ダンテの美学をその哲学論文を中心に論じた出色の論文がある。淺岡深 ダンテの美学、ムネシキ 93, P.41-5

の遊女であったのに天国に迎えられるのである。

Danteはここでトマスにおいて必ずしも明瞭ではなかった二つの美(Pulchrum)をあげている。ひとつは人間に何かpathetiqueなあこがれをあこさせる金星(venere)の輝きを自然美として強調していることであり、いふひとつは命を賭けて神のためにつくすことの美しさ、つまり正しさや善とはどこか違う行々の美、精神の美を強調していることである。周知のようにトマスは『神学大全』の中で、美は明快と調和によって成る(Pulchrum consistit... in quadam claritate et debita proportione)(Summa Theologia II-II, Q. 180, art. 2, ad 3)という。ここでClaritas(明快)とは限定が明確であり、Proportioとは比例的対比が明確であり、前者は対象の、後者は関係の客観的認識の成果である。このようなトマスの美の或何学的、数学的限定性に於いてダンテの美には

Ma per la vista che s' avvalorava 私の視力は見つゝ強まり
in me guardando, una sola parvenza, 唯一の姿が多様に見える。
mutandom' io, a me si travagliava. 私の变化で変わってみえた。

と天国篇三十三歌112-114行で歌われているように、神秘の深まりがある。天国はどの意味で人間が無限者である神に無限に近づくとする生きろ努力のむかわれる所なのである。

そこにはトマスにおける知性の透明性に対し、ダンテの知性の光輝には神秘への対応がある。

4 至福直観 (visio beatifica)

Aristotelesの哲学は人生において何を求めていたか。その目的は幸福(eudaimonia)となつてbeatitudoであった。人間は知的存在であり、真理を求めているから、その幸福は結局真理の「知的直観の生」(ὁ βίος θεωρητικός)であった。その哲学を補完したトマスの場合、「完全な至福」(beatitudo perfecta)とはアリストテレスにおけるようなこの世における知的直観ではなく、神によって天使と同じく天国で与えられる事が約束されているものである。(Promittitur nobis a Deo beatitudo perfecta, quando erimus sicut Angeli in coelo.) (Summa Theol. I-II, Q. 5, art. 2 ad 4)。しかし、この形の完全な至福とはあくまで神を眺めること、仰ぎ見ること、知的直観である。これは光源(lux)とその反射光線(lumen)の照応のイメージである。それは光源と反射光の合成の輝きである。

Danteの場合、美における光輝が神秘への深まりであったと同様、天国篇での人間の存在はトマスの考えを足場として光源としての神への差し迫りが天においてあつたわけと、それは光源の中へ呼び込まれそこで一つとなるunio mystica(神秘的一致)が成立することである。

E' mi ricorda ch'io fui più ardito 思い出せばわれ このためにこそ
per questo a sostener, tanto ch' i' giunsi いよいよ心を堅くして耐え
l'aspetto mio col valore infinito. (Par. XXXII 74-76) わが目を無限の力に合わせる

これはむしろトマスにおける客観的観想のきりめきを光源そのものの光輝の中に神秘的一致の完成としてunio mysticaとして存在を委ねることであり、もしかすると人間の光輝として最高のプラトニックなἐκστασιασμός(ecstasy)の天国における完成と言ってもよからう。

5 系言が 神における一致は愛の完成である。 Unio in Deo perfectio amoris est.